中国四国の旅 2024

2024 年 6 月

旅のチカラ研究所　植木圭二

5 月の末、太平洋の足摺岬から日本海の日御碕まで中国四国地方を横断する 3 泊 4 日の自動車旅を旅友たちと行ってきた。多くの川や海を渡るので様々な橋も渡ってきた。

■岡山駅集合

3 月のある日、「昨年の九州のバス旅が良かったから、今年もどこかに行きたいね」という誘いが旅友のシロちゃんから届いた。私は「どこに行こうか」と返すと、彼は「高知か、山陰に行きたい」と返ってきた。彼の頭の中には既に行きたい場所があったようだ。

九州バス旅に一緒に行った自称美魔女軍団のタヅさんとコマちゃんに声を掛けたら、すぐに日程が決まった。そして行先については私に一任された。(「九州バス旅 2023」参照)

私は高知か山陰かと悩みつつ、この際だから両方行く旅を思いついた。太平洋の足摺岬から四国を横断してしまなみ海道で瀬戸内海を渡り日本海の日御碕に行く中国四国横断ルートだ。

その場合、高知で集合して山陰の松江あたりで解散をするのが普通だが、そうすると行き帰りが大変なので、中間の岡山駅を集合・解散場所にしてレンタカーで巡るコースを計画した。走行予定距離は約 1000km、高速道路も多いので 3 泊 4 日もあれば走れない距離ではない。

5 月下旬、岡山駅に集合した私たち 4 人はレンタカーを借りて、先ずは高知を目指す。

しかしあいにくの雨で、景色は何も見えない。それどころか高速道路の SA（サービスエリア）で昼食を食べていると、全員のスマホに大雨による緊急警報が流れるほどだ。

■はりまや橋

大雨で視界が悪い中、何とか高知市にやって来る。そして観光名所の「はりまや橋」を通過する。現在はコンクリート製だが、復元された初期の朱色の小さな橋もある。残念ながら反対側の車線なのでその橋の写真は撮れなかった。

この橋は何度も架け変わっており、現在の橋の他に、朱色の橋など合計 4 つある。

【はりまや橋】

はりまや橋は札幌の時計台、長崎のオランダ坂と並んで「日本三大がっかり」とも言われている。初めて見るというシロちゃんもがっかりしている。彼はあまり不満を口にする男ではないが、期待した分、落胆が多くなるのは私の持論「期待と落胆」なのだろう。

ちなみ「世界三大がっかり」というのもあって、それはシンガポールのマーライオン、デンマークの人魚姫、ベルギーの小便小僧になる。

坂本龍馬像のある桂浜に着いた頃には雨が上がろうとしているが、太平洋の波は高く荒々しい。

■四万十に泊まる

今宵の宿は四万十川の河口近くにある「四万十の宿」で、JR 四国と四万十市が建築に関与した宿ということで閑静な緑豊かな公園のような場所にある。

中庭を囲むように 2 階建ての建物が何棟か建っている。いかにもカップルや若い娘が好みそうな造りをしている。JR 四国だけあって枕木が多用されているのも面白い。

【四万十の宿の中庭　枕木の通路】

私たちが泊まる部屋は和室だが、室内階段があってそれを登るとロフトに 2 台のベッドがあるという面白い造りをしている。

大浴場は普通の温泉だが、露天風呂は海水を温めた海水露天風呂になっている。海水が混ざり込んだ温泉というのは多いが、ここまであからさまに海水を宣言している施設は珍しい。海水はミネラル豊富で溶存成分も多いから体に良い。温泉ソムリエの私に対して大胆な挑戦か。

夕食の料理はもちろん地元食材が使われており、カツオのたたきや四万十牛の陶板焼きと期待どおりのものが出てくる。

食事の後には雰囲気の良いラウンジで飲み物の無料サービスがある。いつもは焼酎やビールばかり飲んでいるこの面々だが、ここはお洒落にカクテルを注文する。私は昔懐かしいソルティド

ッグを飲みながら静かなジャズを聴き、まったりとした時間を過ごす。
部屋に戻って部屋飲みになる。先ほどのお洒落な雰囲気とは打って変わって、しこたま焼酎を飲み、旅の初日が終わる。

朝食も素晴らしい。中でも目を引くのは TKG（卵かけご飯）だ。地元のブランド米「仁井田米」の炊き立てのご飯、ブランド鶏「土佐ジロー」の卵、鰹節を漬け込んだ「鰹だし醤油」がある。これに高知特産のフワフワの「花かつお」を掛けて食べるようになっている。
私は TKG の専門家「たまごかけごはん研究所」の人から聞いた話を思い出した。
彼の話では TKG を作るには順番があって、先ずはご飯に醤油を掛けて入念に混ぜてから卵を乗せて混ぜると言っていた。それをメンバーに伝えると、コマちゃんは「昔、私の家は貧乏だったから、醤油ご飯に卵 1 個を家族全員で分けてかけて食べていた」と言っている。
4 人はその流儀で TKG を食すと、「これは絶品と言うしかない」と全員が口をそろえて言っている。しかしながらこれだけ素晴らしい食材では、食べる順番は関係ないのかも知れない。

■足摺岬
宿を出て車で小一時間、足摺岬にやって来る。昨夜の雨が嘘のように晴れており、海の青さが輝いている。足摺岬が今回の旅の本来のスタート地点なので、記念撮影をして気合を入れる。

【足摺岬を背景に記念撮影】

ここから四国を横断して瀬戸内海を目指す。そのために四万十川の河口から、山間部に向かうことになる。

■沈下橋（ちんかばし、ちんかきょう）
四万十川の河口近くの堤防の道を走っていると、清流のはずの四万十川は昨日の大雨でだいぶ濁って水かさも増している。
有名な「佐田の沈下橋」にやって来る。沈下橋を初めて見るメンバーもいて、その姿に驚いている。

沈下橋とは橋の欄干がなく、水量が増した時には橋全体が水面の下になる橋なのでそう呼ばれている。欄干を無くすのは流木などが引っ掛からないようにするためで、橋が低いので建設費用も安く済む。その半面、増水時は通行を諦めることになるから割り切ったものの考え方かもしれない。

沈下橋は行政用語では「潜水橋」というが、私にとっては潜水橋というと船が通る時に橋そのものが沈んで航路を空ける降開橋（こうかいきょう）を思い出すので何となくしっくりしない。

【佐田の沈下橋】

この橋は観光名所でもあるが、四万十川にかかる橋の多くは沈下橋なので当然生活に使うから一般の車も渡ることができる。それでも橋の近くに駐車場があって観光客は車を停めて歩いて渡っている。私たちも駐車場に車を停めようとしたが、ちょうど目の前に地元の軽トラが走ってきたので、その後に続いて車で渡る。

水量が多く濁流なので実に不気味で、それに加えて橋には欄干がないので車内には緊張感が走る。いくら直線の橋とは言え 291m もあるので、ハンドルを握る私もかなり緊張している。だが不安な様子を見せると他のメンバーも不安になるので涼しい顔で運転しなくてはいけない。

緊張感の中、何とか渡り切る。少し広い場所に車を停めて今度は歩いて橋を渡る。しかしこれはこれでまたスリリングだ。足がすくむというのはこういうことを言うのだと実感する。それでも何とか渡り終える。しかし車に戻るにはもう一度橋を渡らなくてはならない。

するとコマちゃんが「怖いからもう渡りたくない」と言い、さらに「河童に引きずり込まれるから」と付け足す。河童に詳しい（？）シロちゃんが「この水量なら河童も流されるよ」と言うと、彼女は「流されないために私の美脚を掴むでしょう」と、シロちゃんは唖然としている。

河童はともかく、どうしても渡りたくないコマちゃんを 1 人残す訳にもいかず、シロちゃんも残って私とタヅさんが車に戻ることになった。タヅさんは「怖いもの知らずの彼女の意外な一面を見たわ、でも美脚とやらを掴む物好きな河童も見たかった」と言っている。

四万十川は河童伝説でも有名で、上流には河童専門の博物館「海洋堂かっぱ館」もある。

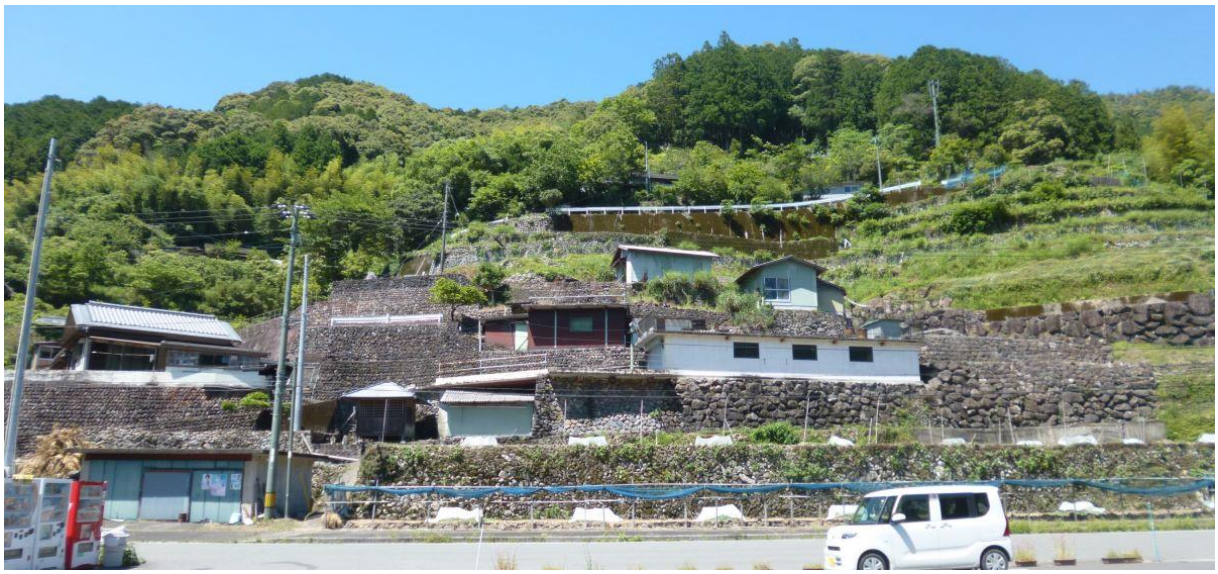
■昼食

四万十川の河口付近は広いが、山間部に行くと徐々に狭くなってくる。四国の山を削り取って蛇行しながら流れていることが分かる。

上流に来ても沈下橋が架かっており、「岩間沈下橋」の近くに食堂がある。

しかしここで私が驚いたのは橋ではなく山の急斜面にある集落の方で、急斜面に石垣を積み上げて段々畑のような場所に家々が建っている。四万十川は人々に豊かな水や魚をもたらすだけでなく、時には洪水にもなるのだろう。人々はそれに備えて少しでも高い場所に暮らしている。

護岸工事で川を制御するのではなく、人間が川に合わせて共生するための術なのだろう。



【岩間沈下橋近くの集落】

食堂に入るとベランダから岩間沈下橋が良く見える。食堂の女店主の話では、昨日は大雨だったので沈下橋は水面下に沈んでいたという。

沈下橋を見ながら食べるうどんは、シンプルながら美味い。

【四万十川に架かる岩間沈下橋】

■しまなみ海道

車は愛媛県の松山市から今治市を抜けて、しまなみ海道に入り来島海峡 SA に立ち寄る。

私は 2 年前にしまなみ海道を歩いて渡った。タヅさんは自転車で渡ったと言っている。歩きでも自転車でもこの SA は遠いので 2 人とも立ち寄っていない。

ここから「来島海峡大橋」が良く見える。この橋は第一大橋から第三大橋の 3 つの橋から出来ていて、しまなみ海道最大の橋になる。瀬戸内海は大型船が通るので、海面からの高さが 65m もある。

【来島海峡大橋　左から第三大橋、第二大橋、第一大橋】

大三島を過ぎて、多々羅大橋を渡ると広島県に入る。海を渡る橋の真ん中が愛媛県と広島県との県境になっている。

■ペンション白滝山荘

広島県の因島の宿「白滝山荘」は、2022 年に私が歩いてしまなみ海道を渡った時に泊まったペンションで、感激をもらった

1931 年築の洋館で、有名なアメリカ人建築家ヴォーリズの作品で建築当初は宣教師の館だったが、現在はペンションになりオーナー家族が経営している。お洒落な外観と落ち着きある館内で、広島県近代化遺産、文化庁登録有形文化財の指定を受けている。

【白滝山荘】

部屋の入口は大きな木製のドア、真鍮のドアノブ、造りつけの家具などは当時のものがそのまま残してある。古いものを残しながらも利便性を考慮して上質のベッド、採光の良い窓はサッシになっておりとても綺麗だ。

食事は和食で、料理を運んできた息子さんに聞くと「父は若い時に 10 年ほど和食の修行をしていました」と教えてくれる。それは前回来た時も聞いた話だが、私はすっかり忘れている。

瀬戸内海で獲れた大きな鯛の塩焼きが出てくる。絶品の塩加減と焼き加減に女性陣は舌鼓を打っている。地元広島の冷酒との相性も良く、ついつい酒が進んでしまう。シロちゃんはもう出来上がっている。（詳細は旅行記「四国中国紀伊の旅 2022」参照）

■白滝山に登る

翌日はペンションの名前にも使われている標高 227m の「白滝山」を登る。とは言っても車で 8 合目まで登れるので 10 分くらいの登山になる。

村上水軍の見張り場所だったという山頂まで登ると瀬戸内海の島々が見渡せる。そんな歴史ある山頂なので、観音堂や五百羅漢もあり観光名所になっているが、地元の人しかいないようだ。ここは穴場で案外お勧めの場所かもしれない。

【白滝山の山頂から瀬戸内海を臨む】

■瀬戸田サンセットビーチ

隣の生口島の瀬戸田集落にコマちゃんの旦那さんが幼い頃に住んでいたというので、島に渡り「瀬戸田サンセットビーチ」に立ち寄る。広い綺麗な砂浜が広がっている。初めて訪れる彼女は「ここは夕日が綺麗なのだろうね」と、たそがれている。

大きな観光バスが数台駐車しており、高校生らしき大勢の若者たちがサイクリング自転車に乗るための講習を受けている。これから生口島一周か、しまなみ海道を走るのだろう。

かつては修学旅行と言えば神社仏閣を見るものだったが、今は明らかに変わってきている。若者たちにとっては、神社仏閣よりも島でのサイクリングの方が圧倒的に楽しいだろう。

修学旅行が“歴史の勉強”から“非日常体験”に変わってきたのだろう。

【瀬戸田サンセットビーチ】

私は常々「旅とは非日常への移動で、その感動は非日常性の度合いに比例する」と言っているが、ようやく文部省・教育委員会も旅の本質に気が付いたのだろうか。

生口島と橋で繋がっている高根島に渡る。この島にグランピング施設があるというので立ち寄ったが、この季節の平日は閉鎖されていて見学さえもできない。

私たちは 1 年前の九州バス旅のグランピングが今でも忘れられずにいる。4 人とも初めての体験で、あまり期待も予想もしないでいたのに驚くほど良かったので感動をした。

旅は期待し過ぎて落胆する「期待と落胆」とは正反対に、期待しないで偶然である感動は何倍にも増幅される。これを私は「偶然と感動」と呼んでいる。

■千光寺

遠い昔に高校生だった私たち 4 人は、しまなみ海道を渡って尾道の「千光寺」を参拝する。この寺はタヅさんお気に入りで、高台にある寺からは尾道の市街地や向島を眼下に臨み、遠く四国も見える。

【千光寺から見た尾道　対岸は向島】

その景色を眺めながら寺の隣の洋食店で昼食を食べる。そして次は山陰を目指す。

■日御碕

山陰の日御碕に到着する。今回の旅のゴールにしていた地点で、「日御碕灯台」がある。

私は日御碕を初めて訪れるのでこの灯台も初めて見るが、その高さに驚く。この高さには世界各地を巡ってきたメンバーたちも驚いている。

看板にこの灯台は日本一高い灯台と書かれている。初点灯は明治 36 年（1903 年）なので 121 年前から点灯している。塔の高さは 44.6m、光の到達距離は約 39km にもなる。

【日御碕灯台】

平日の夕方ということもあって観光客は少ないが、それでもチラホラ見かける観光客はその高さに感動して灯台をバックに記念撮影をしている。

岬の近くの「日御碕神社」を参拝する。朱色を基調とした格調高い神社で、神話に出てく 2 神を祀っている。上下二社があり、上の宮は神素戔嗚（スサノオ）、下の宮はその姉の天照大御神（アマテラス）が祀られている。

【日御碕神社の下の宮】

【日御碕神社の上の宮】

神話では、スサノオの子孫の大国主命（オオクニヌシ）が日本の国を治めていた。そこに高天原に住むアマテラスの孫が降り立つ、これが“天孫降臨”になる。そして国を譲ってくれと交渉する。当然のように紆余曲折あったが最終的には国を譲り、これが“国譲り物語”になる。そしてオオクニヌシはこの世ではなく“あの世”を治めることになり、出雲大社に祀られる。

時の権力者が創った神話なので、日本統治の正当性をやんわり主張しているが、とにかくどこからかやって来た人たちが、日本の統治権を奪ったのだろう。

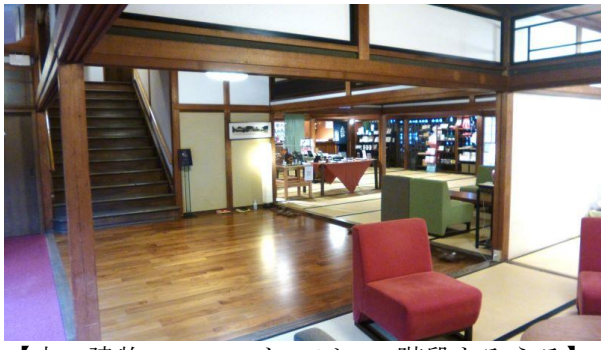
■出雲大社の老舗旅館

出雲大社と書かれた石柱の隣に出雲大社の「勢溜（せいだまり）の大鳥居」がある。その直ぐ近くに老舗旅館「竹野屋」があり、この宿は“歌手 竹内まりあ”の実家になる。

私はいつかこの宿に泊まろうと考えていたが、なかなかその機会がなかった。そして今回は絶好のチャンスで運よく予約もとれたから、その予約日程に合わせて全てのスケジュールを組んでいった。

【竹野屋の玄関と外観】

宿の玄関とロビー、フロントは昔からの古い建物で、2 階部分は安全上の理由なのか現在使用していない。その 2 階に上がる階段横に何やら説明書きがあり、竹内まりあのレコードジャケットの撮影に使われたと書かれている。



【古い建物のフロントロビー　階段もみえる】

古い建物の奥に新しい建物がありシームレスに繋がっている。私たちが泊まる部屋に案内される。10 畳の和室に新しい畳が敷かれており、窓際には上品なソファが置かれている。

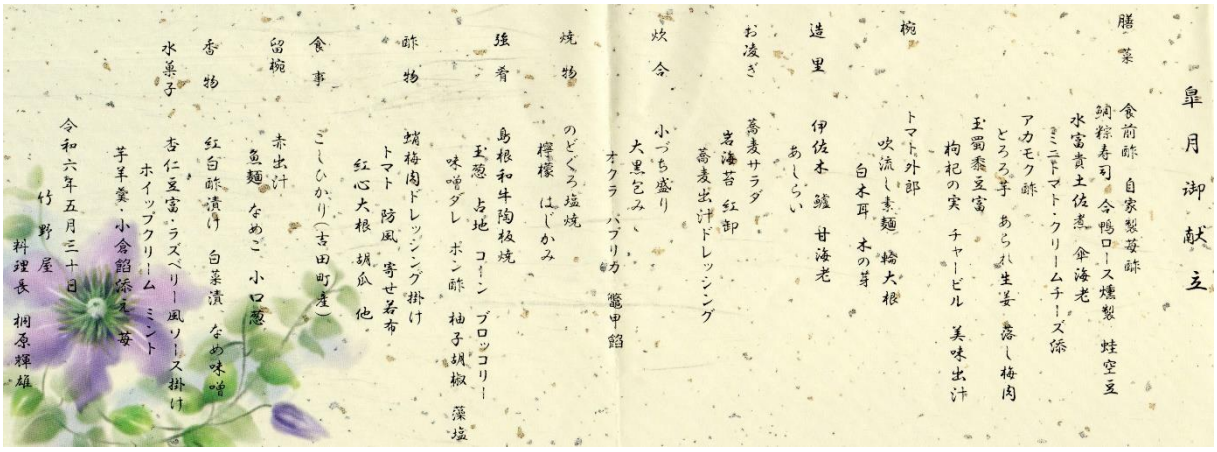
シロちゃんと 2 人で泊まるには充分な広さで、4 人で夜の飲むにはソファのサイズも柔らかさもちょうど良い。実に良く考えられている。

新しい建物に宿泊する施設が全て揃っており、大浴場やレストランがあって食事をしながら見事な中庭を楽しむことができる。

夕食の献立には書き切れないほどの料理が書かれている。もちろんどれも美味いが、中でも蕎麦サラダとノドグロの塩焼きは絶品だ。

食事中は竹内まりあの音楽が流れているからファンにはたまらないだろう。

【レストランから中庭を見る】


皐月御献立
膳部
食前酢　自家製苺酢
鯛粽寿司　合鴨ロース燻製　蛙空豆
水富貴土佐煮　傘海老
ミニトマト・クリームチーズ添
アカモク酢
どろろ芋　あられ生姜　蓴し梅肉
玉蜀黍豆富
枸杞の実　チャービル　美味出汁
椀
トマト外郎
吹流し素麺　椿大根
白木耳　木の芽
造里
伊佐木　鰹　甘海老
あしらい
お凌ぎ
蕎麦サラダ
岩海苔　紅部
蕎麦出汁ドレッシング
炊合
小づち盛り
大黒ゑみ、
オクラ　パプリカ　鶯甲餡
焼物
のどぐろ塩焼
檸檬　はじかみ
強肴
島根和牛陶板焼
玉葱　占地　コーン　ブロッコリー
味噌ダレ　ポン酢　柚子胡椒　藻塩
酢物
蛸梅肉ドレッシング掛け
トマト　防風　寄せ若布
紅心大根　胡瓜　他
食事
こしひかり（吉田町産）
留椀
赤出汁
魚麺　なめこ　小口葱
香物
紅白酢漬け　白菜漬　なめ味噌
水菓子
杏仁豆富・ラズベリー風ソース掛け
ホイップクリーム　ミント
芋羊羹・小倉餡添え苺
令和六年五月三十日
竹野屋
料理長　桐原輝雄

【夕食の献立表】

朝食も立派で、献立表もあるから驚きだ。名入りのシジミ入りの焼きのり、中央の竹野屋三宝膳が自慢らしく紙に書き添えてある。

ありがたいことに宍道湖でとれたシジミ汁がお代わり自由になっている。昨晩、部屋のソファに座って飲み過ぎた私たちにとっては何よりものご馳走になる。

【竹野屋の朝食　品書きとシジミの味噌汁】

■出雲大社

翌朝は宿から歩いて直ぐの出雲大社を参拝する。

出雲大社について今さら書くこともないが、かつて日本を統治していた大国主（オオクニヌシ）を祀った神社なので他の神社とは異なる点が多い。

拝礼は他の神社では 2 礼 2 拍手 1 礼だが、出雲大社だけは 2 礼 4 拍手 1 礼になっている。あるいは旧暦 10 月を神無月と呼ぶのは日本各地の神々が出雲に集まり、神がいなくなるから神無月と呼ぶが、出雲では 10 月を神在月と呼ぶ。

【出雲大社の拝殿】

一通りの参拝を終えて、タヅさんがテレビで見たという本殿の後ろの「素鵞社（そがのやしろ）」にやって来る。

社の軒下に木箱に入った砂があり、その砂を家に持ち帰り家の四隅に撒くことで家を守ってくれるという。ただし皆が砂を持ち帰ると無くなってしまうので、近くの稲佐の浜に行って砂を持ち帰り出雲大社を参拝してから素鵞社の木箱に入れるのが習わしらしい。

タヅさんが見たテレビではそれが出雲大社本来の参拝だと言っていたらしいが、そのことを宮司に聞くと、出雲大社とは関係なく氏子の習わしらしい。

この素鵞社を参拝すると、必然的に本殿を後ろから見ることになる。これがあまり見たことがない景色なのでなかなか面白い。それを見られただけでも素鵞社を参拝した価値があったのかもしれない。

【素鵞社】

【後ろから見た本殿】

■江島大橋

出雲大社のある出雲市は宍道湖に面している。宍道湖は汽水湖で松江の市街地を流れる大橋川で約 7km 離れた中海に繋がっている。そのため汽水湖といっても海水は 1/10 程度で、この微妙な濃度がシジミの栽培に適している。

中海も陸地に囲まれているので湖に見えるが、こちらは正真正銘の海で境港の海峡部で日本海に繋がっている。

中海には大根島と江島という有人島があって、これらの島と陸地を結ぶためにいくつかの橋が架かっている。沈下橋と同様に橋を高くすると建設費用も高くなるので最低限の低い橋になっている。幸いにして日本海は潮の干満の差が極めて少なく、さらに中海は陸地に囲まれて波も低い。

【宍道湖と中海】

【中海の中の大根島と江島】

しかし全ての橋が低いと大きな船が通れないので江島と陸地を結ぶ江島大橋だけは高くなっている。それはしまなみ海道の来島海峡大橋と同じ事情になる。

江島大橋の中央部の高さは 44.7m もあり、中央部だけを高くするという独創的な構造なので、珍しい景観を創り出している。車の進行方向後方から橋を見ると車が急峻な山を登るように見えるから、インスタ映えするフォトスポットになっている。

【江島大橋の遠景と近景】

遠くから見ると異様な景観だったが、近くから見るとそうでもなく普通の橋に見えてくるから不思議なものだ。

【橋の下横から見た江島大橋】

■打ち上げ

岡山駅でレンタカーを返して、岡山の友人から教えてもらった店で打ち上げをする。

最初は普通の居酒屋かと思ったが、それがとんでもない。料理はもちろん美味いが、心配りが実に素晴らしい。

予約していたのでテーブルの隅に「植木様 ご予約ありがとうございます・・・」の手書きのカード置かれている。注文を聞く店員は腰を落としてお客の目線が上に向かないように気を使っている。出てきたビールは銘柄が分かるように銘柄を飲む人の正面に向けて置いてくれる。料理の皿の向きはもはや言うに及ばないだろう。それを若い女性店員がさりげなく行っている。

私は 40 年以上、数えきれない程の居酒屋で飲んでいるが、このような店は初めてになる。旅の締めくくりが幸せな気分で終わることができた。

これは友人に一杯おごらないといけない。

■旅の記録

実施は 2024 年 5 月 28 日（火）～5 月 31 日（金）の 3 泊 4 日、その行程を示す。尚、本文中では、構成上順番を入れ替えたりした部分もあるが、以下が実際の行程になる。

・1 日目　9 時 20 分岡山駅に集合し、レンタカーを借りて出発、瀬戸大橋を渡って四国へ
SA で昼食、13 時 30 分はりまや橋、桂浜、17 時四万十市道埼の日時計
17 時 30 分「四万十の宿」チェックイン

・2 日目　9 時 30 分宿を出発、四万十川の佐田沈下橋、足摺岬を見物、
岩間沈下橋近くの食堂「一新」で昼食、しまなみ海道経由、
17 時 30 分に因島のペンション「白滝山荘」にチェックイン

・3 日目　9 時に宿を出発、白滝山登頂、生口島の瀬戸田サンセットビーチ、高根島を見物、
尾道の千光寺を参拝、千光寺近くの洋食店で昼食、
出雲大社門前の「竹野屋」にチェックイン、日御碕を見物

・4 日目　9 時 30 分に宿を出て、出雲大社参拝、中海の大根島から江島大橋を渡り江島
昼食は「麦苗たまき米子店」、岡山でレンタカー返却（走行距離 1159km）
岡山駅近くの料理屋「伸たこ」で打ち上げ、解散

集合から解散までの費用は 1 人当り約 8 万円、詳細は以下に示す。尚この他に岡山までの新幹線往復費用の 22000 円が追加されて、総費用は約 10 万円

・旅費　54517 円
レンタカー＆ガソリン代（全体で 25520 円＋10317 円）→1 人分 8959 円
高速道路　（全体では 18680 円）→1 人分 4670 円

・宿泊　53362 円
四万十の宿　19587 円（1 人分　1 泊 2 食＋入湯税＋酒代）
ペンション白滝山荘　13775 円（1 人分　1 泊 2 食＋入湯税＋酒代）
竹野屋　20000 円（1 人分　1 泊 2 食＋入湯税＋酒代）

・その他　約 13000 円　4 回の昼食代、打ち上げ費用、酒など

・集合場所までの新幹線往復　21320 円（新横浜～岡山　ジパング倶楽部 3 割引き）